

T E N

英語教師のための情報誌

Vol. **44**
SPRING 2020

T E A C H I N G E N G L I S H N O W

特集

学習指導要領改訂と 教育課程の一貫性

- 01 高等学校では何が変わりつつあるのか 今井 裕之
- 03 実践報告：より良い中高接続のために ～ワクワクする体験を～ 戸田 行彦

連載

- 05 英語教師のための基礎講座 小学校から見た小中接続 (1) 中西 浩一
- 06 Essay Rugby Blossoms in Japan Cameron Blain
- 06 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 To be not, or not to be. 巨理 陽一

SANSEIDO

学習指導要領改訂と教育課程の一貫性

高等学校学習指導要領の改訂は、2009年(平成21年)以来の9年ぶりです。

また、高大接続改革(高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革), 中高一貫校の増加など、高等学校の教育環境は大きな変革期を迎えています。

本特集では、CEFR(ヨーロッパ言語参照枠)を踏まえた到達目標設定、「主体的、対話的で深い学び」による授業改善、パフォーマンス・テスト等の評価方法改善、大学入試改革等によって変わる高等学校外国語科の現状や今後の展望について学習指導要領改訂等の制度面から、中高一貫校での授業改革等の実践面から考えます。

中学校外国語科の到達目標や指導方法の参考になればと思います。(今井 裕之)

01 高等学校では何か変わりつつあるのか 今井 裕之

03 実践報告:より良い中高接続のために〜ワクワクする体験を〜 戸田 行彦

高等学校では何か変わりつつあるのか

今井 裕之
(関西大学)



📢 中高一貫校の増加

「小中一貫教育」「中高一貫教育」「高大接続改革」など、学校種の間の一貫性や接続性を高める教育改革の取り組みが推進されている。確かに一貫校であれば、進学時に中学入試、高校入試、大学入試といった外部が決めた評価尺度に晒されることなく長期的な展望を持った教育ができ、教育課程の一貫性向上の取り組みも推進されるだろう。大学の入学者選抜制度改革がスムーズには進んでいない昨今、生徒や保護者が、中等教育学校等の一貫校への進学や推薦制度等による大学進学を志向するのも自然なことのように思われる。

文部科学省による「学校基本調査」によると、令和元年現在、全国の中学校10,222校のうち、中高一貫校は664校(併設型、連携型の合計)で全体の約6.5%を占めるようになった。高等学校は全4,887校中586校で、約12%となる。中等教育学校も全国で54校にのぼり、平成11年に中高一貫教育校の制度が始まって以来20年間、その数は年々増加傾向にある。義務教育学校(小中一貫校)も平成28年に22校だったものが令和元年では94校になりその間4倍以上に増加している。

一方で学習者の資質・能力や適性に合っ

た学校選びや進学のを保証する意味では、一貫校ばかりではなく、進学時に学校を変わる自由と公平な進学の方法(=妥当で公平な入学者選抜方法)を生徒たちに提供し続ける責務もあるだろう。

小中高大一貫性のある(しかし画一的ではない)教育課程と入学者選抜の開発・運営は、必要不可欠な教育のカナメである。今回の学習指導要領改訂が、小中高一貫した学習者像、学力観、教育内容(指導方法までも)を提示できているのか、各入学選抜改革が妥当、公平、実施可能なものなのかを知ることは、今後さらに教育の質的向上を図ろうとする全ての教員にとって重要事項であるはずだ。対岸の…と見過ごすことはできない。

📖 学習指導要領改訂

筆者は教員養成に携わり「英語科教育法」を指導しているが、学期の最初は学習指導要領の理解から始まる。教員志望学生たちの希望学校種がいずれであっても、小・中・高の学習指導要領の概要や要点を説明している。

「資質・能力の三つの柱」「どのように学ぶのか(主体的、対話的で深い学び)」など、小中高で共通する部分と、各学校で段階的

に指導内容(言語材料、言語活動など)を配置し、適切なバトン・リレーを行っていくべき部分とがある。

小中高共通する部分については、すでにご存知かとは思いますが、今一度確認しておきたい。

目標:育成すべき資質・能力の3つの柱は、学校教育法に記された学力の三要素を基に、Fadelら(2015)のFour Dimensional Modelの要素も踏まえ、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」である。中核となる思考力、判断力、表現力については、外国語科では、目的や場面、状況に合った言語運用ができること、高等学校ではディスカッションディベートなど、さらに高度な言語運用能力が求められる。知識・技能については、思考・判断・表現のために「生きて働く」ものとして結び付けられている。同様に「学びに向かう力、人間性等」のうち評定の対象となる「主体的に学習に取り組む態度」も、思考・判断・表現の言語運用活動に取り組む態度(=粘り強さ、自己調整)として位置付けられている。

指導方法: 今回の学習指導要領改訂では、どのように学ぶかについても言及され、授業改善が促されている。「主体的、対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)がそれぞれあるが、到達目標を設定する、活動の見通しを立てる、言語活動を行う、活動を振り

返るの4段階のプロセスが提案されている。

高等学校の独自性を示す内容については、様々あるが、「言語活動の高度化」もその一つである。小中では、目的、場面、状況に合う言語運用を思考・判断・表現活動と解釈しているが、それに加えて、ディベートやディスカッション等の活動を通して、論理的に考え、情報を収集し、日常的・社会的な話題について議論する。「論理・表現-I-III」の科目が目指す高度な言語活動の姿である。学習指導要領に設定された「話すこと[やり取り]」の目標は、以下のような構成をとっている。

話題
・日常的话题や社会的な話題について
支援・条件
・使用する語句や文、対話の展開などにおいて支援をほとんど活用しなくても ・複数の資料を活用しながら ・聞き手を説得できるよう
英語の質・規準
・多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて ・論理の構成や展開を工夫して
タスク
・ディベートやディスカッションなどの活動を通して、意見や主張、課題の解決策などを詳しく話して伝え合うことができるようにする

①どんな話題について、②どんな条件や支援があれば、③どんな英語を用いて、④何ができるのか、が記述されている（他の学校種も同様）。このような4要素を踏まえて、授業の言語活動をデザインし、パフォーマンス評価等を行うことが求められている。

「コミュニケーション英語」が「英語コミュニケーション」になり「英語表現」が「論理・表現 (English Logic and Expression)」と名前を変えただけではなく、CAN-DOで到達目標を立て、「思考力、判断力、表現力」すなわち目的や場面、状況を踏まえた言語使用能力を育成する指導目標を一層明確にしたことが今回の学習指導要領改訂のポイントではないだろうか。さらに、コミュニケーションへの積極性よりもむしろ、活動への「粘り強い」取り組みの中で「自己調整」

を図るメタ学習能力を「主体的に学習に取り組む態度」と位置づけたことも実は大きな変革であろう。

3 高大接続改革

大学では、学習指導要領は適用されないが、学力の三要素は2007年の学校教育法改正時に提示され、さらに今回の高大接続改革答申により、以下のように示されることになった。

1. 基礎的な知識・技能
2. 思考力・判断力・表現力等の能力
3. 主体性・多様性・協働性

これを受けて、現在すでに大学の3ポリシー（ディプロマポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー）もこの三要素の観点で記述され、各講義・演習科目のシラバスも、この三要素に基づいて書かれている。一步先んじて、授業改善に取り組むことになっていると言えるかもしれない。しかし、このような「高大接続」は果たして必要なのだろうか。

高校卒業後、大学（4年制）への進学率は、現在50%を超えている（2019年度は53.3%）。進学率の過去の推移に目を向けると、約30年前（1990年）は25%である。4人に1人の割合だったのが、現在は2人に1人の割合で大学進学するようになったと考え、高等教育の大衆化、そしておそらく国際化は、今後ますます進むことになるだろう。大学がより明確な教育方針（ポリシー）を示すことは、より多様な学生に対する説明責任と言えるかもしれない。授業研究を通して小中高の先生がたと日常的に話をすると、「共通のフレームワーク」を得たことは、相互理解を深めるにあたり、大きな役割を果たしている。「主体性や自己調整のために、私はタスクをやった後の自己評価で、英語力の自己分析や次回の目標確認をしています。」といった具合に。

4 何が変わるのか

今回の学習指導要領改訂、中高一貫校

の増加、高大接続改革答申で、教育の何が変わるのか。戸田行彦先生の実践報告から、その素晴らしい成果と可能性、いくつかの課題もがしっかりと読み取れると思う。中高一貫校は、天国ではなく、むしろ学校文化が時に衝突する異文化コミュニケーションの現場でもある。筆者は守山中高を訪問させていただいたことはないが、いくつかの小中、中高一貫校の研究開発に長年関わっており、一朝一夕に一貫性は生み出しにくく、歯車が噛み合うまでには時間がかかる。新しい組織（共同体）がうまく機能するために、参加者である主体が、互いに協働できる目標（ゴール）を設定・共有し、目標達成のために何が必要を見出し（他教科のリソース・ツール）、協働のために貢献できる自らの役割（ロール）を常に探しながら、定期的に話す時間を設ける（ルール）ことが寄与することを「活動理論」は教えてくれる。組織運営自体が主体的・対話的で深い学びであり、主体性・多様性・協働性である。何が変わるのか？生徒たちの学習成果でもあるが、実は教員集団の変化かもしれない。

5 Creating a Happier School/ Classroom Life

学習指導要領が変わると教科書も変わり、教材研究の時間がかかる。英語は各レッスンにトピック・テーマがあるから、教科書改訂のたびにやり直した。今回の学習指導要領は指導や評価の方法にも踏み込んで来ているし、小学校英語もあるし、根こそぎ変えなきゃいけない。なんで英語科だけが…、もっともである。「大学もそうなんですよ、まずは組織づくりからやっています。職員室ないから大変（笑）」と、同じ課題を抱えて話し合える人がいることを、協働の契機と考えられるなら、同僚や生徒たちとの今の生活をhappierなものにできるのではないだろうか。

【引用文献】
文部科学省（2019）。「学校基本調査報告書」
文部科学省（2018）。「高等学校学習指導要領」
Fadel, et al. (2015). *Four Dimensional Education*. Center for Curriculum Redesign.

実践報告

より良い中高接続のために ～ワクワクする体験を～

はじめに— ワクワクする2020年に

2020年の幕開けです。この記事に目をとめてくださった先生方は、2020年をどんな1年にしたいですか。個人的にはオリンピック・パラリンピックがあるので、ワクワクする1年にしたいと思っています。

さて小学校では次年度4月より新学習指導要領が全面実施になります。中学校では2021年度から全面実施、高等学校では2022年度から年次進行で実施されます。研修会に行くと「小中高の連携」が大切だと言われますが、忙しい学校現場において、連携とは簡単にできるものではないと筆者は考えています。

今回は、そんな現状の中、本校（併設型の中高一貫教育校）における中高接続に向けた英語科の取り組みを「教科横断」、「学年横断」、「授業交流」、の三つの視点で紹介させていただきます。

教科横断： 中高ディベート学習

① 中学：国語科と英語科の連携

中学校では、特色ある科目「ディベート」で、国語科と英語科が連携して、3年間指導している（表1）。

国語科では2年生後期から準備型のディベート対戦を、英語科では3年生から準備型のディベート指導（4：4）をしている。

英語科では3年生後期から準備型の対戦を行っており、3学期より高校接続を意識し、即興型のディベートに取り組んでいた。論題については戸田（2017）を参照。

② 高校：総合的な学習の時間と英語科

高校では、総合的な学習の時間（以下、総学）と英語表現I（以下、英表I）で連携して指導している（表2）。

まず、英表Iの1学期の授業で、簡単な論題で英語による即興型のディベート学習・対戦をする。次に、総学の2学期の授業で、簡単な論題で日本語による即興型→準備型のディベート学習・対戦をする。最後に、英表Iの3学期の授業で、総学の論題を用いて、英語による準備型のディベート学習・対戦をする。論題については竹下（2019）を参照。

【表1】国語Dと英語Dの3年間の単位表

科目	中学1年生	中学2年生	中学3年生
国D	17単位 (前期)	(後期) 17単位	17単位 (前期)
英D	35単位	35単位	35単位

【表2】総学と英表Iの高校1年生概略図

高1	1学期	2学期	3学期
総学	ガイダンス等	即興型→準備型 日本語	
英表I	即興型 英語	練習 試合等	準備型 英語

② 学年横断： 中3 vs 高1の英D対戦

① 目的は生徒の交流

2015年度より中高合同授業を年々改善を加えながら実施している（表3）。この授業は、筆者が、高校進学を直前に控えた中3の担任をしている時に、当時高1を担当していた（その前年、中3担当の）英語科教員から、一度やってみないかと話を持ち掛けられて始まった。ちょうど中3も高校生活に期待と不安を持っており、1学年上の先輩たちが、高校入学後、どのように過ごしているのか気になっていた。また高1にとっても後輩の中3に、高校生活の様子を伝えたり、入学前の3学期にできることなど、アドバイスできる機会にもなると考えた。

② 各学期に変化：互いに刺激を受け成長

1学期は中学生2人と高校生2人で4人グループを結成し、中学生が学習している論題で、互いに協力しながら2：2のディベート対戦（立論：中3A、質疑：高1A、反論：高1B、判定：中3Bのみ）を実施した。中学生は、はじめ緊張を隠せなかったが、高校生のアドバイスも受け、今後の英語ディベート学習の動機が高まったという感想が多く見られた。高校生も1年前を懐かしく思い、先輩として助言することに意義を感じていた。

2学期は中学生と高校生がそれぞれ賛成側と反対側に分かれて、4：4でディベート対戦（立論、反論、再反論、要約）をした。高校生を超えようとする中学生、負けるものかと必死に反駁する高校生という構図で、互いに切磋琢磨していた。判定は英語科教員10名に協力してもらい、全10グループに各1名ずつ入ってもらった。

3学期はディベートの形態を即興型にして（3：3）で対戦を行った（立論、反論、再反論）。中高生それぞれ4人グループを作っているため、残る一人ずつで判定を行った（表4）。高校生の論の切り返しに中学生は刺激を受けていた。なお1・3学期においては、肯定側と否定側の両方を行い、ディベートスキルの向上を目指した。授業後にアンケートを取ったが、8割の生徒がこの授業を肯定的にとらえていた。戸田（2019）参照。

【表3】中高合同授業実施の経緯

年度	1学期	2学期	3学期
2015年度	—	—	即興型
2016年度	—	準備型	即興型
2017年度	準備型	準備型	—
2018年度	準備型	準備型	即興型



戸田 行彦(滋賀県立守山中学校・高等学校)

滋賀県立守山中学校・高等学校教諭。滋賀県立高校2校を経て、2014年度より現職。2018年度に開催された第68回全英連滋賀大会にて、中高一貫教育校としてのディベート指導の在り方について分科会発表。現在、高校2年生担当。高校時代のSELHi経験を活かし、教科書のフル活用から英語ディベートまで、4技能をバランスよく指導することをモットーにしている。

【表4】総学と英表Iの高校1年生概略図

	形態	対戦人数	形式
1学期	中高チーム 立論：中3A 質疑：高1A 反論：高1B	3:3 ※判定： 中3B 2人	準備型
2学期	中3 vs 高1 立論、反論、 再反論、要約 の4役	4:4 ※判定： 教員	準備型
3学期	中3 vs 高1 立論、反論、 再反論 の3役	3:3 ※判定： 中3高1 2人	即興型

3 授業交流： 日頃からできる取り組み

① 中学校での見通しを持った取り組み

中学校には英語科教員が3名いる。2クラス×3学年の学校なので、必ず各学年担当の英語科教員がいる。英語の授業（4単位）は全学年T-Tで行っているため、T2で入るJTEが1学年上の授業に入り、**次年度の授業構想を描くことができる**。例えば、中2担当の教員が、次年度担当する中3の英語の授業のT2で入ることができる。生徒間の交流は学校行事や部活動以外にはないが、教員自身が複数学年の英語の授業に入ること、見通しを持って日々の授業を行うことができる。

② 中高英語科教員の授業交流

本校の特徴の一つに、中高の教員が相互に授業交流できることがある。交流というのは、単に高校教員が中学の授業を見に行くのではなく、**実際に授業担当者として入ることである**。逆も同様にある。現在授業交流をしている科目は、中学英語と、中学英語ディベート、高校英表I、高校英表IIの4科目である。交流できる科目は毎年変わるが、**年々授業交流が活発**になってき

ていると筆者は感じている。考えられる理由として、中学教員にとって、授業交流を行うことで、**中学で教えていた生徒たちの高校での伸長がわかること**、また高校教員にとって、今後高校へ進学してくる中学生を教えることで、生徒理解が深まり、**スムーズな中高接続につなげることができること**である。このように中高双方の教員が互いに授業交流の機会を持つことで、生徒にとっても教員にとっても、中高一貫教育校として良いサイクルを作ることができている。余談であるが、前述2の中高合同授業を実施するにあたり、**中3英語ディベートと高1英表Iの担当者と同じ2名にした年もある**。生徒が交流するなら、教員もということで、同じ担当者が入ることで時間割も合同授業を組みやすく、1年に3回も交流授業を持つことができた。互いに学び合うのは生徒だけではなく、教員側にも必要であると感じた。

4 週に1度の 教科会議の時間

① チーム英語科(縦のつながり)

さて、三つの視点について述べてきたが、それら三つの支えになっている土台を紹介する。それは**週に1時間、時間割に組み込まれている英語科会議の時間**である。

A. 英語科主任発の回覧について、協議が必要なのについて議論する。回覧で済むものの中にはあるが、回覧後、互いに意見を言い合うことも大切であると考えている。また最近はいろいろな調査が来るのでそのことに関する英語科としての共通理解（コンセンサス）を図ることもある。

B. 英語科研究授業を行う。研究協議は昼休みや放課後になることもある。

C. 各学年の取り組み。長期休み中の教

材や教授法の情報共有等行う。

② 学年英語科会議(横のつながり)

上記①の会議の後、時間があれば、学年担当者英語科会議を行う。進捗状況、困っていること、上手くいっていることなどを互いに報告し合う。特に高校2年生英表IIは担当者が6名と多いので、定期試験の2週間前には試験会議を実施している。

おわりに—連携を確実なものにするために

最後に、中高接続を考えるにあたり、冒頭にも連携は難しいと書きました。話を聞いたり、読んだりすることで理解は深まると思いますが、**連携は進まない**と考えています。様々な形で協力はできるかもしれませんが、**実際にその場に行って身をおかないとわからない部分が多々あります**。筆者自身も中学部に所属している時は高校のことはわかりませんでした。2年前、高校に移り、中学と高校の両方のことを考えられるようになりました。連携を確実なものにするために、そしてワクワクする2020年4月を迎えるために一緒に一歩踏み出してみませんか。

参考文献

- ・ 竹下厚志(2019)『読解力と表現力を高めるSDGs英語長文 Think Share Act』三省堂
- ・ 戸田行彦(2017)「英語ディベートを通じた中学高校における英語学習」『滋賀大学教育実践センター紀要』第25号、1-7
- ・ 戸田行彦(2019)「中高一貫教育校における英語ディベート指導のあり方研究—ディベートを通じた中高生の絆プロジェクト—」『第68回全国英語教育研究大会紀要』pp.174-178.

小学校から見た小中接続(1)

— 言語材料,教材,言語活動, —

中西 浩一 Nakanishi Koichi (平安女学院大学)

① はじめに

今回から3回連続で「小学校から見た小中接続」について考えてみたいと思います。1回目は、文部科学省が「小中接続のために小学校から中学校へ伝えてほしいこと」として挙げている3点—「言語材料」「教材」「言語活動」についてです。

② 「言語材料」及び「教材」

言語材料を教材とセットで見てください。2020年4月に中学校へ入学する生徒たちは、基本的に、文部科学省作成の移行教材『We Can! 1, 2』を使って学んでいます。しかし中学校の教科書と異なり、本教材に言語材料はほとんど提示されていません。指導編には、デジタル教材の音声のスク립トが載っていますが、どのような学習の流れや場面でその言語材料が使用されているのかを知る必要があります。その点で最もわかりやすいのが学習指導案例とワークシートです。いずれも文部科学省のウェブサイトからダウンロードできます。

Small Talkで使用される英語や、Let's Listen, Let's Watch and Thinkではどのような英文を聞き、その概要を捉えようとしているのか、Let's Talkではどのようなやりとりが行われ、その次のLet's Read and Writeでの書き写しやSounds and Lettersでの文字指導、そして最終のActivityではどのような言語活動が設定

されているのか等を知ることができます。しかし、これらの「教材」を見るだけでは実際に何がどの程度生徒に定着しているのか、いないのかがわかりません。

小学校でどのような英語を使って指導されるのか、どのような英語によるインプットがなされているのかわからないと中学校で十分な備えができません。中学校の先生はぜひ、校区の小学校へ出向き、授業を見せてもらいましょう。ワークシートや振り返りを見せてもらったり指導内容や指導方法、児童の様子等も聞いてください。直接授業が見れば一番いいのですが、無理であれば授業のビデオを借りるのもいいと思います。ただし、その際に年頭に置いておきたいことがあります。小学校では一部専科教員が指導を行っている学校もありますが、基本的には英語指導の専門家ではない学級担任が大変な努力をしながら指導しています。お互いをリスペクトし合う姿勢を忘れないようにしたいものです。

③ 「言語活動」

②でも少し触れましたが、最も重要なのが「言語活動」です。小学校では、言語形式よりも伝達内容に重きが置かれており、コミュニケーションの相手、目的、場面等の設定が丁寧に行われています。チャンツやゲーム等もありますが「練習して終わり」ではなく、単元のすべての活動が、単元末

の言語活動につながるよう設定されています。

言葉は場面とセットです。生徒が入学後すぐに、復習のつもりで英語だけによるOral-interactionやDemonstrationを行っても生徒にはピンとこない場合があります。ぜひ小学校で使われていた絵カードを使って、場面や状況を再現しながら、インプットされた英語を引き出し、中学校での活動に導いてください。同様に小学校で習ったであろう英文だけを提示し、読むように促しても難しい場合があります。小学校でも文字は一定扱いますが、入学直後の生徒の中に残っているのは、やはり音声によるインプットです。語頭音等の指導は行われていますが、フォニックスルールは指導されていません。英文が文字だけで示されても読めないことが多いのです。場面とセットで音声から導いてあげてください。その後文字(英文)を提示すれば、生徒の中でつながると思います。

「中学校外国語：移行期間における指導資料(小中接続・帯活動)」として文部科学省から具体的な補助資料も提供されています。それらも参考にしながら、校区の小学校と連携し、生徒にとってスムーズな小中接続が行われるよう願っています。

【参考文献】
「新学習指導要領に対応した小学校外国語教育新教材について」
平成30年9月 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室



Cameron Blain (Myojo Gakuen Elementary School)

'Scrum'? 'Ruck'? 'Knock-on'? 'Maul'? There was a time, not so long ago, that these words meant absolutely nothing to me. Growing up in Canada, rugby *wasn't even a blip on my radar. It was only a few years ago that a Japanese friend of mine (and rugby fanatic) introduced me to the sport. New Zealand, Wales, France and even Canada - there were no limits to where he would travel to get his next rugby *fix. Sadly, my good friend is no longer with us, but I know he would have been very proud to see what the Brave Blossoms achieved at the 2019 Rugby World Cup.

I think Shinzo Abe had it right when he said Japan's *unprecedented run to the quarter finals "was like a dream". Amazingly, the Blossoms won all of their pool A games, shocking higher-ranked opponents like Scotland and Ireland along the way. If this wasn't enough, Japan became the first Asian team in rugby history to reach the final eight of the World Cup!

Andy Bull, a writer for The Guardian newspaper wrote an interesting article back in October. He mentions a shrine he found in Marunouchi, a shrine dedicated to none other than - rugby! Custom fit with AstroTurf and distinctively red gates shaped like goal posts, the bilingual sign out front reads "Pray for the happiness of all who love rugby".

When I read this, I couldn't help but smile. The image of my

friend lining up to pray at a shrine dedicated to the sport that he loved seemed to embody everything the Rugby World Cup meant to me, both on and off the field.

The pride I felt seeing the Canadian team helping the victims of Typhoon Hagibis is something I will never forget. Watching this Japanese team *defy the odds and win against stronger opponents again and again was truly inspiring. Experiencing the passion and excitement of everyone cheering on their new found heroes was nothing short of *infectious.

My rugby friend once said to me that life is like the cherry trees that blossom every spring - beautiful but tragically short. If he were here today, I think he'd say the same of the Brave Blossom's World Cup performance - beautiful but tragically short. I bet he would also say that, like the blossoms every spring, we are sure to see this Japan team come back better and stronger than ever.

*"wasn't even a blip on my radar" → insignificant. Not important.
 *fix - a dose of a drug to which one is addicted (in this case the drug is rugby)
 *unprecedented - never done or known before
 *defy the odds - to accomplish something that most would think impossible
 *infectious - likely to influence others quickly

*Article: Andy Bull. (2019, October 22). "Joy and pride stirred by Japan is real value of this Rugby World Cup" [blog post], *The Guardian*. Retrieved from <https://www.theguardian.com/sport/blog/2019/oct/22/japan-rugby-world-cup>

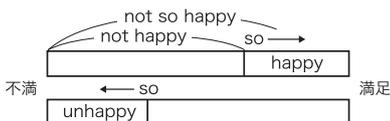


リクツで納得! 学校英文法の「文法」 亙理 陽一 (静岡大学)

To be not, or not to be.



That is a question ... sometimes. 前回取り上げた「形容詞が表す尺度の中間領域」(例えば young/old のどちらでもない年齢)を理解すると, not を用いた否定と接辞による否定の関係についての理解を深めることができる。接辞による否定とは, impossible や carelessness のように, 否定の意味を表す接辞によって否定的概念(不可能な・不注意な)を表現するものである。例えば, なんらかの決定に不服を表明する際, I'm **not** happy with the decision. より I'm **unhappy** with the decision. のほうが(話し言葉の際はプロソディも影響するが)明確に不満であることを示している。両文の意味の違いは, so や deeply など形容詞が修飾されるとよりはっきりする(下図)。



単語で否定的概念が表されるということは, それが語として自立し得るほど明確な意味を持っているということだ。それは, unhappy のように反意的な意味を強く表す場合もあるし, **undo** が (do/not do の関係での「頑として行わない」といった意味ではなく)「はずす」,「取り消す」を表すように, 元の反意関係とは異なる意味を獲得する場合もある。ただし, 原理的には接辞を用いて語彙的否定を無限に生み出すことができるものの, それがどのくらいはっきりした概念なのかは語によって

異なり, not を用いた否定と同じ自由度で使えるわけではない。例えば I'm **not** sad. に対して **unsad** という語をこしらえて, I'm **not** happy. に対する **unhappy**. のように使うことは難しく, 文脈と聞き手の背景知識に依存した特殊な解釈を要求することになるだろう。

単語レベルの否定表現がこのような特徴を持つのは, 「否定」(Neg)の範囲が語の中に閉じていて, 否定の範囲が狭く特定のことに由来することによる。類似の説明が no (を含む否定語)にも当てはまる。**No** は **not** ... any と同じ意味で書き換え可能と説明されることがあるが, 実際は, I will sit down and **not** say anything. と I will sit down and say **nothing**. のように, 「何かを言う」という行為を否定している前者より, 「ゼロを言う」, すなわち全く何も言わないということを伝える後者のほうが発言しない意思は固い(Bolinger, D. (1977). *Meaning and form*. Longman. p. 57). 上記の **so unhappy** の意味的構造を **SO[Neg(HAPPY)]** と表せば, **not so happy** は **Neg[SO(HAPPY)]** と表現される。英語では, 否定を表す語句の構造上で下に来るものがその影響を受ける範囲となる。人生は山あり谷あり, He is **not always** happy. (**Neg[ALWAYS(HAPPY)]**) は普通のことだが, He is always **not** happy. (**ALWAYS[Neg(HAPPY)]**) は随分救いがない。

否定の範囲を理解すると納得を深められる現象がいくつかある。例えば **must not** と **don't** have

to についてそれぞれ意味を覚えなくても, 前者は **MUST[Neg(DO)]**, つまりしないことに対する主観的義務を表明しており, 後者は **Neg[HAVE TO (DO)]**, しなければならないという義務を否定していることが否定の範囲から説明できる。他にも英語では, think や believe, expect のような推測を表す動詞の場合, (a) I think it **won't** rain. のように従属節を否定する内容でも, (b) I **don't** think it will rain. と否定語を前に出すことが好まれると言われる。これに対する「英語では否定語を文頭に置く傾向があるから」という説明は実は不正確で, それは, (a) が「雨が降る」という事柄を直接的に否定したという印象・言質を聞き手に与えることになるのに対し, (b) は事柄からは遠い位置に置くことによって意味が曖昧になる分, 比較的穏当な否定となることによる。実際, 推測を表す動詞以外, 例えば I promise **not** to be late. と I **don't** promise to be late. とでは意味が全く異なってしまうのだから, 「否定語を文頭に置く傾向」という説明は成り立たない。否定の範囲に基づくほうがより統一的な理解が得られるのだ。

曖昧さによる表現効果は, いわゆる二重否定にも見られる。本来 possible/impossible に中間領域はなく, It is **not impossible**. は It is possible. と論理的には同値のはずだが, 伝わる意味は同じではない。直接的な言い方をせず, わざわざもって回った言い方を選択しているという事実がその効果を生むというわけである。



エースクラウン英和辞典 第3版

投野由紀夫 [編]

英和 約51,000

和英 約24,000 項目収録

カナ発音付き

「話す」「書く」の基本は
まずこの58語から!

新デザインの
「フォーカス
ページ」

新学習指導要領で
数が増える学習語を
身につけるための指針を!

「CEFR-Jロゴ」
「中高教科書ロゴ」

NEW

チャンク学習で
発信力アップ!

新コラム
「チャンクで
おぼえよう!」

NEW

クラス最大級の
和英小辞典が
さらにパワーアップ!

「高校実業科・
ICT用語小辞典」

NEW

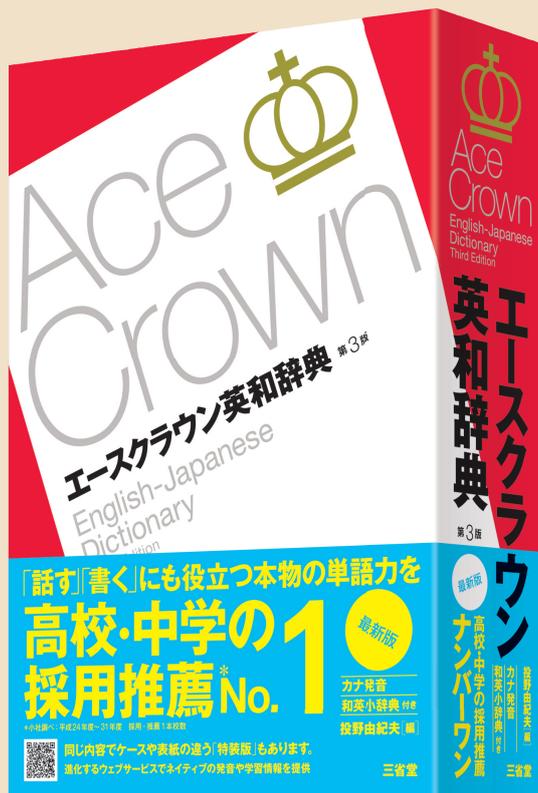
CAN-DOの発想で
暗記だけでは終わらない
アクティブな学習を!

新コラム
「CAN-DO
Tips」

NEW

4技能入試の
ライティング対策にも
チャンク学習を!

新コラム
「チャンクで
英作文」



「エースクラウン英和辞典
第3版」刊行によせて

投野由紀夫
(東京外国語大学
大学院教授)



「話す」「書く」にも役立つ本物の単語力を
高校・中学の
採用推薦No.1

最新刊
カナ発音
和英小辞典
投野由紀夫 編
三省堂

同じ内容でケースや表紙の違い! 特装版もありです。
電子版のウェブサービスでネイティブの発音や学習情報を提供

B6変型判 1,856ページ

定価(2,800円+税)

ISBN 978-4-385-10868-1

時代が求める本物の英語「発信力」をつける辞書

英語がなかなか上達しない原因のひとつは、「いちばん重要な基本単語が使えるように訓練されていない」ということです。本辞書はビッグデータ(コーパス)による最重要語の解析を「フォーカスページ」で解説。さらに「発信(話す・書く)」を意識した「チャンク学習」、「英語でできること=CAN-DO」の視点を有機的に連携して「発信力」をつける辞書のあり方を提案します。 [編者 投野由紀夫 本書まえがきより抜粋]



三省堂 教科書・教材サイト

<https://tb.sanseido.co.jp/>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06(6341)2177

■名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052(953)9211

■九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092(531)1531・1532

■札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011(616)8722